

発達障害児の社会性の状態把握、および子育て環境としての安定した家庭作りのための調査研究事業
 社団法人 精神発達障害指導教育協会 理事長 金子 健
 (報告書A4版 19ページ)

事業目的

本調査の第一の目的としては、発達障害児における社会性の発達状態と課題をすることである。さらに第二の目的として、家族、特に母親のメンタルヘルスの状態を明確にすることである。

事業概要

内容：発達に障害のある子の家族に、以下の内容のアンケート調査を実施した。その項目は、子どもの年齢、診断名、診断を受けた時期、記入者の年代、就労の有無、家族構成、家族・親族・地域との関係、記入者の抑うつ状態、育児に関するストレス、育児全般への意識、社会性の状態、不適切行動の実態、親離れ・子離れへの意識と実態、家族として知りたいこと、希望する育児支援である。

方法：アンケート調査用紙を郵送し、返送を依頼した。一部、当協会やクリニックの来院時に持参された方もいた。調査対象者は、当協会指導室および、クリニックのリハビリテーション室を利用している951名である。そのうち、期限までの有効回答は781名であり、回収率は82%であった。

アンケート結果の分析・集計については、大和コンピューターサービス株式会社に委託して行った。

(大和コンピューターサービス株式会社 〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町1-8-4 東商共同ビル)

事業結果

1. 回答者とその年代、対象児・者の年齢層

回答者は781名で、その年齢は、3歳から50歳までであり、年齢層は表1の通りである。家族形態は核家族が77%と最も多く、夫婦間のコミュニケーションや協力関係については、夫婦関係は良好であると答えた人が79%、コミュニケーションも取れていると感じている人が73%、子育てに協力し合っていると感じている人が72%、きょうだい間の関係については良好であると回答したのが72%であった。アンケート調査の記入者については、母が最も多く、95.4%が母親による回答となった。記入者の年代は、表2の通りである。

表1 対象者の年齢層

	人数	%
幼児	130	16.6
学童	447	57.2
中高生以上未成年	172	22.0
成人以上	32	4.1
合計	781	100

表2 記入者の年代

記入者の年代	人数	%
20代以下	-	-
20代	1	0.1
30代	257	32.9
40代	438	56.1
50代	66	8.5
60代以上	8	1.0
無回答	11	1.4
合計	781	100.0

2. 対象者の診断名

保護者の記入する診断名による分布は、表3の通りであるが、自閉症、広汎性発達障

害が多く、ついで、知的障害であった。これらについては、複数回答があり、また保護者の記入したものであるため、それらが完全に正しいものであるかについては、やや疑問が残る点もある。

表3 保護者記入による診断名

診断名	人数	%
自閉症	282	36.1
広汎性発達障害	282	36.1
知的障害	252	32.3
注意欠陥多動性障害	78	10
アスペルガー症候群	59	7.6
学習障害	19	2.4
ダウン症候群	17	2.2
発達性協調運動障害	11	1.4
反抗挑戦性障害	2	0.3
その他	109	14
無回答	23	2.9

※複数回答

表4 診断名によるグループ

診断名	人数	%
PDD群	399	51.1
PDD+MR群	156	20.0
MR群	107	13.7
ADHD群 (一部MR含む)	31	4.0
その他群	63	8.1
無回答	25	3.2
全体	781	100.0

また、診断名により、①知的障害の群（ダウン症候群を含む）、②広汎性発達障害の群（自閉症、アスペルガー症候群を含む）、③広汎性発達障害と知的障害の群、④ADHDの群（ADHDと知的障害も一部含む）⑤その他群、の5群にグルーピングした上で、分析等を行った。各群による分布は表4の通りである。

3. 子どもの社会性の発達段階について

子どもの能力を、社会性の8段階で評価を行った。これは、本児をよく知る指導担当者による評価である。その分布については、表5の通りである。

表5 社会性の発達段階とその分布

社会性段階	内容	人数	%
A	「チョーダイ」と言われたとき、渡すことができる段階	46	5.9
B	「～して」と言われたときそれを実行できる段階	138	17.7
C	「あとで」で待てる段階	155	19.8
D	順番を守ることができる段階	190	24.3
E	目標を意識し、取り組むことができる段階	73	9.3
F	じゃんけんがわかる段階	101	12.9
G	決められた時間になると寝る、など、行動を起こすことができる段階	36	4.6
H	よそとウチの区別ができ、外では行儀よくできる段階	28	3.6
I	時間に合わせて、計画的に行動することができる段階	13	1.7

4. 子どもの様子について

子どもの現在の様子について、社会性を中心とした19項目と、子どもの不適切行動に関する9項目に関して、「しばしばする」「まれにする」「しない」「よくわからない」の4段階について、回答を得た（表6、表7）。

他者とのコミュニケーション手段として、3)自分の思いや要求を伝えようとする手段を持っているかについては、80%近くがその手段を持っていると答えている。

また、社会性に関しては、1)挨拶を自分からする、を「しばしばする」とした人は、42%であったが、2)人からあいさつされたらあいさつを返す、は「しばしばする」とした人が58%であった。また、7)人から「～して」「～しなさい」と言われた時に、言われたことをする、8)「あとで」と言われた時に待つことができたり、順番を守ることができるといった項目について、「しばしばする」と答えた人が、どれも60%以上であった。また、11)一人でいても好きなことや楽しめることがある、という項目についても、「しばしばする」と答えた人が75%と多かった。

不適切行動に関しては、1)自分の体をかむなどの自傷行動、2)人に乱暴するなどの他害的行動は、「しない」と答えた人が60%前後であった。また、6)強迫的行動は「しない」と答えた人が、81%、7)固着的、執着的な行動についても、「しない」とした人が、69%であった。

3)感情のコントロールが悪い、に関しては、「しばしばする」がやや多くなり37%、4)奇声を発する 5)動き回ってしまう、も「しばしばする」が20%強という結果であった。

表6 子どもの現在の様子（社会性について）

	全体	しばしばする	まれにする	しない	よくわからない	無回答
1)挨拶を自分からする	781 100.0	335 42.9	271 34.7	165 21.1	2 0.3	8 1.0
2)人からあいさつをされたら、あいさつを返す	781 100.0	460 58.9	265 33.9	45 5.8	3 0.4	8 1.0
3)自分の思いや要求を伝えようとする(身振り、指差し、言葉、絵、文字など何でも可)	781 100.0	603 77.2	146 18.7	10 1.3	7 0.9	15 1.9
4)ほめられたことを理解している	781 100.0	639 81.8	106 13.6	2 0.3	20 2.6	14 1.8
5)注意されたこと、叱られたことを理解している	781 100.0	563 72.1	163 20.9	14 1.8	32 4.1	9 1.2
6)「ちょうだい」といわれた時に、持っているものなどを相手に渡す	781 100.0	667 85.4	90 11.5	11 1.4	3 0.4	10 1.3
7)人から「～して」「～しなさい」といわれたときに、言われたことをする	781 100.0	604 77.3	142 18.2	18 2.3	5 0.6	12 1.5
8)「あとで」といわれた時に、待つ	781 100.0	496 63.5	231 29.6	31 4.0	6 0.8	17 2.2
9)「順番」「かわりばんこ」など、いわれた時に、待つ	781 100.0	506 64.8	210 26.9	42 5.4	16 2.0	7 0.9

10) やっていい？などの許可を求める行動をする (言葉と限らない)	781 100.0	446 57.1	241 30.9	77 9.9	8 1.0	9 1.2
11) 一人でいても、好きなことや、たのしめるものがある	781 100.0	592 75.8	131 16.8	39 5.0	11 1.4	8 1.0
12) ○になりたい、上手になりたい、と思っている	781 100.0	389 49.8	186 23.8	84 10.8	116 14.9	6 0.8
13) じゃんけんの勝ち負けを理解する	781 100.0	415 53.1	79 10.1	219 28.0	62 7.9	6 0.8
14) 勝ち負けにこだわりすぎる	781 100.0	131 16.8	193 24.7	405 51.9	49 6.3	3 0.4
15) 決まりや約束事を守ろうとする	781 100.0	285 36.5	297 38.0	132 16.9	54 6.9	13 1.7
16) 決められた時間に、そって行動しようとする(たとえば、登校したり、寝ようとするなど)	781 100.0	327 41.9	228 29.2	179 22.9	36 4.6	11 1.4
17) 他人の家と自分の家で、態度を使い分ける	781 100.0	208 26.6	235 30.1	255 32.7	75 9.6	8 1.0
18) 時間に合わせて、計画的に行動する	781 100.0	133 17.0	248 31.8	352 45.1	41 5.2	7 0.9
19) 自由な時間に、目を離していても、安心して一人で時間を使う	781 100.0	341 43.7	229 29.3	167 21.4	37 4.7	7 0.9

表7 子どもの不適切な行動

	全体	する しばしば	る まれにす	しない	らない よくわか	無回答
1) 自分の体をかむ、などの自傷行動をする	781 100.0	73 9.3	176 22.5	521 66.7	8 1.0	3 0.4
2) 人に乱暴をするなどの他害的行動をする	781 100.0	54 6.9	280 35.9	427 54.7	17 2.2	3 0.4
3) 感情のコントロールが悪い(泣いたり、怒ったり、不自然に笑いすぎたりする)	781 100.0	292 37.4	353 45.2	119 15.2	14 1.8	3 0.4
4) 人に迷惑をかけるような声を出したり、奇声をあげる	781 100.0	175 22.4	332 42.5	254 32.5	13 1.7	7 0.9
5) 物事に集中せず、じっとしていたほうがよい時でも、動き回ってしまうなどがある	781 100.0	206 26.4	356 45.6	199 25.5	15 1.9	5 0.6
6) 手を繰り返し洗う、などの強迫的な行動をする	781 100.0	23 2.9	89 11.4	635 81.3	30 3.8	4 0.5
7) 移動や会話などの際に、体が固まってしまい、動かなくなる	781 100.0	39 5.0	157 20.1	539 69.0	42 5.4	4 0.5
8) 予定変更などを受け入れられない	781 100.0	49 6.3	352 45.1	355 45.5	22 2.8	3 0.4
9) 性に関する抑制のきかない行動をする	781 100.0	18 2.3	80 10.2	522 66.8	157 20.1	4 0.5

3. 子どもの障害の原因と母親

子どもの障害の原因を母親のせいといわれたかどうかについて、聞いたところ、あると答えた人が、3割以上いた（表8）。またそれについて、母親自身がそう思っているかどうかについて聞いたところ、今でもそう思っている人、時々そう思う、という人が3割以上いる。

表8 「母親のせい」と言われたことがあるかどうか

	人数	%
ある	275	35.2
ない	413	52.9
よくわからない	84	10.8
無回答	9	1.2

表9 子どもの障害を「母親のせい」と思うかどうか

	人数	%
以前は思っていたが今は思っていない	257	32.9
時々そう思う	236	30.2
思っている	33	4.2
いつもそう思っている	4	0.5
その他	212	27.1
無回答	39	5

4. 周囲からの支えについて

同居している家族以外の、周囲の人たちなどから、支えられていると感じるかどうかについて聞いたところ、表8のとおり、81%は支えがあると感じていることがわかる。また、その支えてくれる人がどのような関係の人たちかを聞いたところ、もっとも多かったのは、血縁関係の人で72%であったが、次に、子どもを通じて得た保護者が51%であった。

表10 周囲からの支えを感じるか

	人数	%
感じる	635	81.3
感じない	76	9.7
よく分からない	64	8.2
無回答	6	0.8

表11 支えてくれる人の存在

支えてくれる人との関係	人数	%
血縁関係	461	72.6
子どもの友人の保護者	327	51.5
親の知人または友人	248	39.1
有料のヘルパー	116	18.3
近隣の方	82	12.9
ファミリーサポートの会員	44	6.9
有料のベビーシッター	12	1.9
その他	156	24.6
無回答	2	0.3

5. 抑うつ状態について

記入者の現在の精神状態について、東京大学の鈴木庄亮教授による抑うつ状態チェックリストに基づいて調査をし、それを得点化した結果を、表12に示した。

表12 抑うつ状態と、診断群

		全 体	22 以上	2 以下	無回答	
体		781 100.0	172 22.0	601 77.0	8 1.0	17.1
診断名	群	107 100.0	20 18.7	84 78.5	3 2.8	15.6
	群	399 100.0	99 24.8	298 74.7	2 0.5	17.6
	群	156 100.0	24 15.4	130 83.3	2 1.3	16.6
	群(一 群 む)	31 100.0	11 35.5	20 64.5	- -	19.6
	その他群	63 100.0	15 23.8	47 74.6	1 1.6	17.3

本チェックリストでは、得点が10点から30点の範囲にあり、その中でも22点以上が抑うつ状態と判断される。発達に障害を持つ子どもの家族では、全体では22%が抑うつ状態にあるといえる。また、診断群によるちがいとしては、ADHD（一部MRを含む）群が35%で、ついで、PDD群24.8%であった。ADHD（一部MRを含む）群では、平均値も19.6点とやや高めの傾向を示している。

6. 育児ストレスについて

子育てに関する18項目について、加藤らの行った、育児ストレス尺度を用いて、調査を実施した。18項目について、「よくあてはまる、ややあてはまる、あてはまる、あまりあてはまらない、全然あてはまらない」の5尺度で評定してもらい、「よくあてはまる」を1点とし、「全然あてはまらない」を5点とし、10個の否定項目（*）については、点数を反転させて、集計を行った。さらに、4点、5点のついている得点が高い人たちを高ストレス群として、診断群による違いなどを検討した（表13）。

表13 診断群ごとの育児ストレス

(表の数値は、「よくあてはまる」と「ややあてはまる」とつけた、高ストレス群の人の比率)

	① MR 群	② PDD 群	③ PDD+ MR 群	④ ADHD 群 (一部MR 群含 む)	⑤ その 他群	全 体	参 考 数 値 (健 常 児)
	107	399	156	31	63	781	38
	ス ト ス 群 の (%)						
1)子どもと 持ちが い合っているように思 う	12.1	22.8	21.8	19.4	25.4	21.1	5
2)子どもが まれてよかったと思う	6.5	9.5	7.7	9.7	9.5	8.6	0
3)これからの が し である	36.4	41.6	33.3	38.7	33.3	38.2	5
4)子どもと一 にいると しい	18.7	17.5	9.6	19.4	14.3	15.9	3
5)子どものことでよくよ えてしまう	44.9	52.6	46.8	45.2	50.8	49.7	47
6)子どもがわずらわしいことがある	38.3	35.3	33.3	38.7	41.3	35.5	61
7) によって自分も していると思う	7.5	7.0	4.5	9.7	7.9	6.7	11
8)時間を子どもに取られて、 が くなる	26.2	23.6	26.3	25.8	25.4	24.2	39
9) 日同じことの繰り返しで が まるよう な感じがする	31.8	24.8	26.9	32.3	20.6	26.0	32
10) のために自分は ばかりしている と思う	22.4	18.8	25.6	29.0	17.5	20.9	26
11)自分一人で子どもを てているように思う	21.5	16.5	19.9	38.7	19.0	18.8	24
12)子どもは自分の きがいである	40.2	25.6	26.3	35.5	34.9	28.6	11
13)ちょっとしたことで子どもをしかる	34.6	39.1	32.7	48.4	39.7	37.5	63
14)子どもをしかるとき、たたいたりつ ったり する	16.8	18.8	19.2	22.6	19.0	19.0	50
15)自分から子どもをあやしたり、 んであげ たくなる	30.8	31.8	28.2	32.3	36.5	31.1	8
16) 、目 めがさわやかである	45.8	54.4	51.3	77.4	65.1	54.3	29
17) につまずくと自分を める	26.2	28.8	30.1	29.0	34.9	28.4	34
18)なんとなくイ イ する	39.3	37.1	35.9	38.7	28.6	36.1	50

7. 親の負担感・困難感について

表14の33項目について、親の負担感・困難感について、調査を実施した。各項目に対して、「とても大変、いくらか大変、少し大変、まったく大変ではない、よくわからない」という5段階で回答を得た。

1) お子さんに発達障害があると分かるまでの悩みや、2) お子さんに発達障害があるとはっきりしたときのこと、20) 義務教育終了後の進路について、21) 学校卒業後の就職先について、22) 成人してからの暮らしについて、25) 親亡き後のことについて、29) 福祉施策などが十分とはいえないことについて、といった項目について、とても大変と感じていることがわかった。また、15) お子さんをめぐっての近隣との関係について、18) 園や学校の先生との関係については、まったく大変ではないという人が3割ほどいる、という結果であった。

表14 親が負担・困難さを感じる項目

	全 体	と も も 大 変	い く ら か 大 変	少 し 大 変	な い ま っ た く 大 変 で は な い	よ く わ か ら な い	無 回 答
1) 子さんに発達障害がある、とわかるまでの	100.0	55.6	18.7	16.3	4.6	4.5	0.4
2) 子さんに発達障害がある、とはっきりしたときのこと	100.0	58.0	20.1	16.5	2.9	1.8	0.6
3) 子さんの障害を、家や親に理解してもらうこと	100.0	32.9	22.4	26.6	14.7	2.7	0.6
4) 子さんの障害について、子 さん自身がそれを 識すること	100.0	25.0	9.0	11.1	5.6	48.3	1.0
5) 同年 の子どもと、 した 方をしてしまうこと	100.0	26.6	27.0	25.9	12.7	6.8	1.0
6) 奇 な目や の目で られ てしまうこと	100.0	33.9	28.7	27.5	6.8	2.7	0.4
7) 差別的に われたこと	100.0	29.3	26.5	26.2	9.0	8.5	0.5
8) 子さんのきょうだいのことにつ いて	100.0	16.0	19.5	23.3	13.7	9.9	17.7
9) 日々の子どもの 話について	100.0	24.3	32.4	34.7	7.7	0.6	0.3
10) 日の や について	100.0	21.0	28.4	31.4	13.2	4.6	1.4

11)学校での 強について	100.0	15.4	24.6	23.2	19.8	14.0	3.1
12)家 での子どもとのコミ ーションについて	100.0	11.8	27.0	41.4	18.2	0.4	1.3
13)家 での子どもの行動の について	100.0	18.7	28.6	39.6	11.4	0.6	1.2
14)家 での子どもの感情の について	100.0	19.7	28.3	36.7	13.1	1.2	1.0
15) 子さんをめ ったの近隣との 関係について	100.0	8.3	13.2	31.5	36.4	9.3	1.3
16)保 や 、習い事など の子ども集 に入れることにつ いて	100.0	27.3	27.1	29.1	10.6	4.2	1.7
17)他 との友人関係について	100.0	21.9	28.7	27.9	11.9	7.8	1.8
18) や学校の との関係につ いて	100.0	13.2	20.9	30.7	31.6	1.9	1.7
19)学校入学のときの、学校や学 の について	100.0	38.3	21.6	22.4	12.9	3.5	1.3
20) の につ いて	100.0	48.0	16.9	11.5	5.5	15.4	2.7
21)学校 の について	100.0	59.4	11.8	4.9	1.5	19.1	3.3
22) 人してからの らしについて	100.0	58.4	13.7	5.0	1.2	19.1	2.7
23)親離れについて	100.0	45.3	19.1	12.2	3.5	17.7	2.3
24)子離れについて	100.0	37.8	20.5	17.4	5.5	16.1	2.7
25)保護者 き のことについて	100.0	68.8	9.7	4.4	0.6	14.3	2.2
26) にできる子 ての情 が ないことについて	100.0	28.9	28.6	27.4	8.5	5.1	1.5
27) 的な相 などができる 関が ないことについて	100.0	33.9	26.4	25.9	9.2	3.5	1.2
28) 制度の情 がよくわからな いことについて	100.0	35.7	26.0	27.9	4.4	4.9	1.2
29) などが 分とはいえ ないことについて	100.0	58.4	20.2	13.1	1.9	5.1	1.3
30) に行く などが制限されて しまうことについて	100.0	25.7	29.1	23.9	15.2	4.9	1.2
31)安心して受診できる 関 が ないことについて	100.0	29.1	24.5	26.5	16.3	2.7	1.0

32) での ができにくいこと について	100.0	26.8	25.4	30.3	10.5	5.5	1.5
33)障害を持つ子どもを てくれた り、 かってくれる が ないこ とについて	100.0	38.3	24.7	19.7	9.6	6.1	1.5

10. 将来の生活スタイルについて

将来の生活に不安を感じると同時に、具体的なイメージを持てているかどうかを調査したところ、将来の生活を考えたことがある人は約79%、考えたことがない人が約7%であった（表15）。その具体的なイメージとしては、グループホームなどでの少人数での暮らしをイメージしている人が、37%であった。具体的にはまだ考えていない、という人も約17%ほどいた（表16）。将来のイメージを描いていない理由としては、本人がどう育つのかのイメージがもてないなどが理由として多かった（表18）。

表15 将来の生活についての考え

	人数	%
ある	614	78.6
ない	52	6.7
どちらともいえない	109	14
無回答	6	0.8

表16 具体的なイメージ

	人数	%
ルー ー など 人 数での らし	229	37.3
体的にはまだ えてい ない	104	16.9
親や親 と同	92	15
	53	8.6
一人 らし	37	6
での らし	30	4.9
その他	18	2.9
無回答	51	8.3

表17 将来の生活についての考えと子どもの年代

			学		中 校 以		20 以上 人	
体	130	100	447	100	172	100	32	100
ある	97	74.6	333	74.5	156	90.7	28	87.5
ない	15	11.5	32	7.2	2	1.2	3	9.4
どちらともいえない	17	13.1	77	17.2	14	8.1	1	3.1
無回答	1	0.8	5	1.1	0	0	0	0

が人数、%

表18 将来を考えたことのない理由

	人数	%
本人がどう つかのかがよく分からない	18	34.6
子どもがまだ さい	8	15.4
あまり のことを えても 方がない	6	11.5
本人の が だと思ふ	5	9.6
あまり のことを えたくない	4	7.7
など制度が変わる可 性がある	1	1.9
本人の がいろいろかわる	0	0
その他	3	5.8
無回答	7	13.5

11. 親離れについて

親離れ・子離れについて、どのような考えを持っているかについて調査した。自分の子どもの親離れが進んでいると思うかを聞いたところ、進んでいない、と感じている人が43%であった（表19）。親離れについての具体的な取り組みとしては、身辺自立やお手伝いが上位に上がり、車内マナーといった社会性、留守番や一人歩き、一人通学など、実際に一人で活動できる時間を作ることなどに取り組んでいる（表20）。

表19 親離れについての考え

	人数	%
すすんでいない	339	43.4
すすんでいる	140	17.9
よく分からない	294	37.6
無回答	8	1

表20 親離れに向けての具体的な取り組み

	人数	%
身 自	620	79.4
家事などの 手伝い	579	74.1
内 一	418	53.5
守番	360	46.1
一人 き	335	42.9
一人 学	333	42.6
時計の 断	291	37.3
の計	266	34.1
自 などの 一	236	30.2
時間の自 理	215	27.5
リ ーションなど の し方	201	25.7

の理	177	22.7
話などの使い方	104	13.3
その他	79	10.1
無回答	40	5.1

12. 知りたいこと、知りたかったこと

保護者として、これまでの子育ての中で知りたかったことや、知りたいことについて、さまざまな選択肢の中で、複数回答してもらったところ、表21～表24の結果となった。また、今後希望する支援としてどのようなものが考えられるかを聞いたところ、表23のような結果となった。

表21 知りたいこと（病気や診断名について） 表22 知りたいこと（制度など）

	人数	%
自閉症	292	37.4
発達障害	256	32.8
知的障害	246	31.5
障害を持つ子の学	182	23.3
知	166	21.3
度発達障害	158	20.2
てんかん	116	14.9
アスペルガー症候群	110	14.1
自閉症	106	13.6
	93	11.9
言 障害	79	10.1
	68	8.7
チツ	62	7.9
障害	20	2.6
障害	12	1.5
無回答	189	24.2

	人数	%
の	485	62.1
障害者自 支	341	43.7
保護者支	335	42.9
別支	299	38.3
制度	249	31.9
別支 計画	230	29.4
他の 関の情	197	25.2
ウン リン	186	23.8
手	149	19.1
学 運	125	16
年間計画	82	10.5
無回答	89	11.4
その他	49	6.3

表23 知りたいこと（子どもの能力など）

	人数	%
	499	63.9
思	456	58.4
感情やそのコントロールに関する こと	444	56.9
社会性	400	51.2
コミ ーション	376	48.1
性に関すること	365	46.7

友人関係について	332	42.5
発達のこと	312	39.9
言 発達	289	37
身 自	289	37
ことば	271	34.7
行動の	271	34.7
学習の	264	33.8
知	222	28.4
や 一に関すること	210	26.9
あそ	172	22
運動の め方	172	22
に関すること	148	19
事に関すること	138	17.7
に関すること	114	14.6
無回答	47	6

表 2 4 希望する育児支援など

	人数	%
子どもの や 関、 などのパイ がほしい	505	64.7
子どもを けられる がほしい	319	40.8
子どものことを相 できる人や が しい	306	39.2
のサービス、制度の情 を えて しい	282	36.1
同じ障害を持つ子どもの家 などの 間が しい	149	19.1
子どものことを 強する がほしい	129	16.5
子どもの 話をしてくれる人がほしい	119	15.2
障害を持たない家 などの 間がほしい	42	5.4
子どものことを 強する などが知りたい	25	3.2
その他	120	15.4
無回答	46	5.9

1 3. その他の調査項目

そのほか、記入者の生活状況や育児環境に関して、調査を実施した項目は表 2 5 に示すとおりである。

表 2 5 その他の調査項目

記入者の就労状況	親離れについての考え
家族構成	子離れについての考え
診断名とそれを受けた時期	親離れに向けての具体的な取り組み

考察および今後の展開

1. 社会性の発達とその課題

本調査の目的の一つである社会性の発達とその課題に関して、「しばしばする」として
いる人の割合を、年代別にならべてみたところ、課題の内容によって、年代を追うごとに
変化していくもの、とその割合が変わらないものに分けることができた。

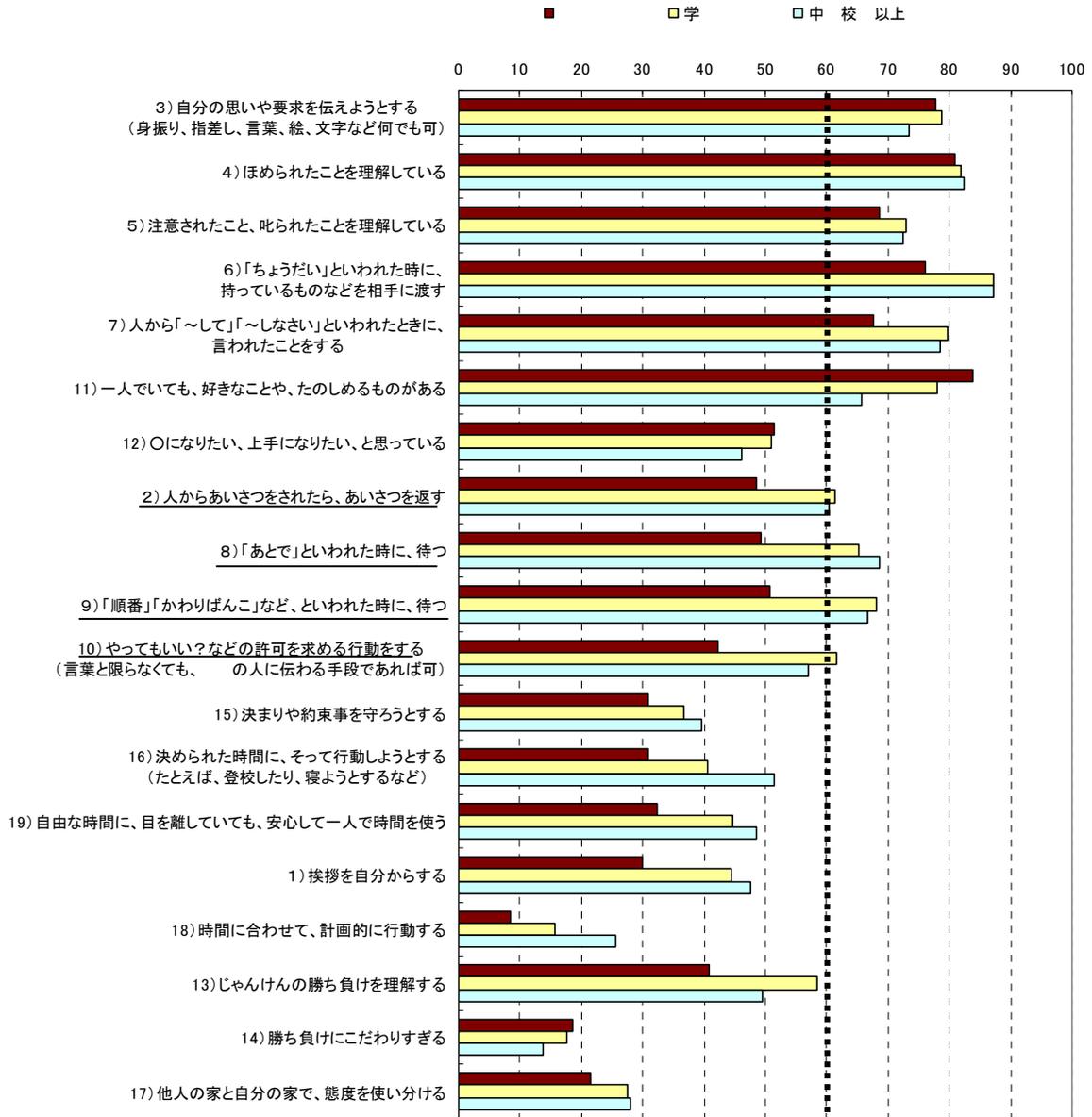


図1 年代別「しばしばする」の割合

図1をみると項目3)自分の思いを伝える手段の有無や、4)5)ほめられること、しかられることの理解、6)7)「ちょうだい」や「～して」と言われたときにそれに応じる、11)一人の時間に好きなものや楽しめるものがある、といった項目では、どの年代についても、ほぼ70%以上の割合で、「しばしばする」ことができる、と判断されている。年齢や障害の程度にかかわらず、障害があってもかなりの人たちがこうした課題を比較的早期から、理解していく可能性を持っていることを示唆している。障害を診断されたばかりの家族を支援するときに、今はできなくても、こうした力はかならず育つものであることを支援者は自信を持って伝える必要があると考えられる。

また、2)人からあいさつをされたらあいさつを返す、8)9)あとで、順番、といわれたら待てる、10)「やってもいい？」などの許可を求める行動については、幼児期にはそう多くないが、年代があがるにつれて「しばしばする」割合が上がり、学童期には、60%を超える人たちが、しばしばするとされている。つまり、これらは、年齢を重ねる中で獲得していく可能性がある課題であると思われる。

さらに、15)16)決まりや時間を自発的に守ろうとする、や18)19)計画的な時間のすごし方、などについては、獲得の率は低いながらも、年代によって獲得していく可能性があると思われるが、これらについては、時間という抽象概念との関係から、知的障害の程度などの要因も大きく関わってくると思われるため、診断種別やその程度などを考慮したより詳細な検討が必要であろう。

2. 家族のメンタルヘルス

先行研究で、渡部らは、対人関係や知的障害を持つ児の母親の育児ストレスや疲労感は、健常児や運動障害を主とした児よりも高いことを示唆している(1)。庄司らの研究においても、一般の育児グループの母と、1歳6カ月健康診査後の育児支援を必要としているグループの母においては、育児ストレスについて有意な差があることを報告している(2)。また障害児の問題行動についても、母親の育児負担感に影響をあたえ、なおかつ、問題行動のうち、感情統制困難の因子が有意に影響を与えていることを明らかにした報告もある(3)種子田ら、2004)。

また、メンタルヘルスについては、主観的健康調査THIによる結果として、児の障害について、自分のせいと思ったり、母親のせいと言われた人では、抑うつ傾向を認め、家族の協力や夫の支援が少ないと感じている人では心身症状の訴えが多かったという(4)竹内、2000)。

本研究では、表12に示した通り、非抑うつ状態といわれる21点以下の人が、77%という結果となった。同調査によると、1993年に約1万人の男女に行った結果、96.4%が21点以下に入るとされており、これと比較しても、抑うつ状態の人がかなり多いことがわかる。また、今回の記入者は圧倒的に女性が多いので、一般の女性の平均点13.8点と今回の調査結果の平均点17.1点を比較すると、t検定により5%水準で有意差があると認められた。また、診断種別にみたとき、ADHD群において平均点は19.6点であり、これらを今回の調査対象者全体の平均点と比較したとき、t検定により5%水準で有意差があると認められた。診断名による違いが、どのような要因を生じさせ、抑うつ状態に反映されるのか、詳細な検討は今後の課題といえるが、ADHD児の保護者に対しては、家族のメンタルヘルスに関しても、より配慮した関わりが求められているといえる。

また、障害の原因について、母親のせいと言われた人（表27）、および、周囲からの支えを感じていない（表28）という人たちのグループでは、 χ^2 乗検定により、1%水準で抑うつ状態との関連があることが明らかになった。障害の原因は、ほとんどの場合が原因不明であるにもかかわらず、理由もなく「母親のせい」といわれ、精神状態を悪くすることがないように、家族への障害告知やその後の支援、教育の中で、その原因について誤解が生じないように、啓発を十分に行ったり、家族全体や周囲の支えなどの環境までも視野に入れた支援を考えていく必要がある。

また、問題行動については、自傷行動や他害行動、強迫的、固着的執着的行動の有無については、抑うつとの関連は見られなかった。しかし、感情のコントロールが悪い群、他人の迷惑になるような奇声を上げる群、多動な行動がコントロールできない群、性に関する衝動の高い群という4つの項目については、 χ^2 乗検定により、1%水準で抑うつ状態との関連が明らかとなった。

これらは、先行研究の結果を明確に裏付けたことに加え、感情以外の行動の問題についても、保護者のメンタルヘルスと関連することが明確となった。こうした問題行動に関して、支援者は見通しを持った教育、支援を行うことが求められているといえる。

27 抑うつと障害の人

	のいとわ れた	われて いない	合計
抑うつ22以上	82	193	275
抑うつ21以下	67	343	410
合計	149	536	685

17 56404

28 抑うつとからの支えの有無 (人)

	支えを感じ ない	支えを感じ る	合計
抑うつ22以上	42	105	147
抑うつ21以下	34	527	561
合計	76	632	708

χ^2 乗値 = 61.59784

29 抑うつと感情のコントロールの (人)

	い	く ない	合計
抑うつ22以上	82	18	100
抑うつ21以下	206	100	306
合計	288	118	406

7 877884

30 抑うつと奇声の有無 (人)

		なし	合計
抑うつ 22 以上	52	39	91
抑うつ 21 以下	121	212	333
合計	173	251	424

12 80945

31 抑うつと動き回るなどの行動の関係

		なし	合計
抑うつ 22 以上	61	35	96
抑うつ 21 以下	143	160	303
合計	204	195	399

7 796421

32 抑うつと性に関する 動的な行動

	の	なし	合計
抑うつ 22 以上	9	101	110
抑うつ 21 以下	9	414	423
合計	18	515	533

9 805915

また、育児ストレスについては、表 1 3 に先行研究の結果を付記してあるが、それと比較したとき（図 2）、子どもとの心理的交流や遊び、子どもとの楽しみ、いきがい感、子どもが生まれたことへの肯定感、これからの育児への楽しみ、目覚めのさわやかさ、といった内容について、障害のある子どもの家族のほうが、ストレスを抱えていることがわかる。支援するものには、子どもと過ごす時間の具体的な関わり方が求められると同時に、記入者の健康上の負担への理解や配慮も必要と思われる。また、保護者が知りたい内容として、就労や将来の生活を挙げている（表 2 5、2 6）ことともあわせ、将来への不安などに関する情報や、長期にわたる支えの仕組みが必要と考えられる。

しかし、全般的には、先行研究の健常児群の高ストレス群よりも、少ない数値になっているものも多い。つまり、障害のある子の家族だから、といて、必ずしも、高ストレスを抱えている人が多いわけではない。子どもが煩わしいと感じたり、同じことの繰り返しに息が詰まる、一人で育てている感覚、子どもをしかる時にたいたり、つねったりする、ちょっとしたことで子どもをしかる、子どもによって自分も成長している、といった項目については、今回の検査結果のほうが数値が低い。

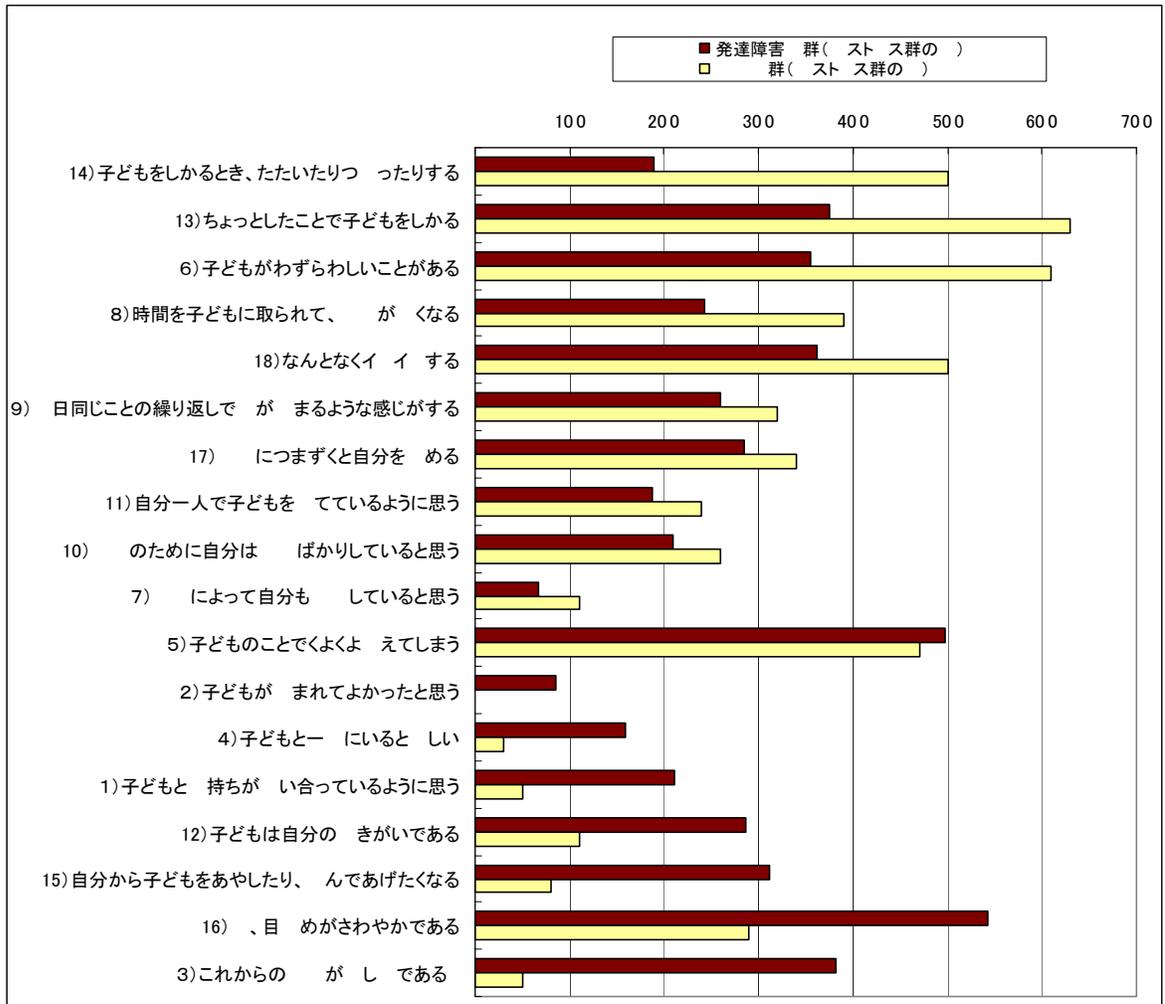


図2 育児ストレスの比較

障害のある子どもを育てていると、毎日同じことを根気よく繰り返す中で、一つのことを学ぶのには時間がかかるが、学べた時の喜びはまた大きいものがある。さらに、「子はかすがい」という言葉があるように、障害があるがゆえに子どもの行動や対応について、家族間で話しをする機会も増え、家族のコミュニケーションや協力関係も良好であるのかもしれない。また、今回の記入対象者は、民間の支援機関で、何らかの支援を受けている人であるが、そういう場合には、一人で育てている感じをもたずに子育てができているともいえる。さらに、年長になった保護者から、「この子のおかげでいろいろなことを学ばせてもらった」「この子がいたから、気付けなかったことに気づかせてもらった」などの言葉を聞くことがあるが、育児によって自分も成長していると思う、という項目で、高ストレス群が少ないこととも関連があると思われる。

ただ、これらの点については、先行研究の調査対象が、3歳～5歳の幼児38名であることや、保護者が子どもの障害を認識し、受け入れていく過程のどのプロセスにあるかももちろん考慮して考えなければならないと思われるが、障害のある子どもと長期的に生活して

いった場合には、トータルすれば、そういうストレスが少ないという結果になり、長期的ななかかわりを持てるようなシステムを整え、充実させることによって、保護者のメンタルヘルスを軽減させる可能性があるといえるだろう。

参考文献

- (1) 渡部奈緒、岩永竜一郎、鷺田孝保 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感—運動発達障害児と対人・知的障害児の比較—。小児保健研究 2002 : No.61、第4号、2002
- (2) 庄司妃佐 軽度発達障害が早期に疑われる子どもをもつ親の育児不安調査。発達障害研究 2007 : No.29、第5号、2007
- (3) 種子田綾、桐野匡史、矢嶋裕樹、中嶋和夫 障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係。東京保健科学学会誌 2004 : No.7、第2号、2004
- (4) 竹内紀子 療育機関に通う発達障害児を持つ母親のメンタルヘルス。小児保健研究 2000 : No.59、第1号、2000
- (5) 眞野祥子、宇野宏幸 注意欠陥多動性障害児の母親における育児ストレスと抑うつとの関連。小児保健研究 2007 : No.66、第4号、2007
- (6) 一瀬早百合 障害のある乳児をもつ母親の苦悩の構造とその変容プロセス—治療グループを経験した事例の質的分析を通して—。小児保健研究 2007 : No.66、第3号、2007
- (7) 加藤道代、津田千鶴 宮城県大和町における0歳児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の検討。小児保健研究 1998 : No.57、第3号、1998

事業実施機関

社団法人 精神発達障害指導教育協会

〒115-0044 東京都北区赤羽南2-10-20

TEL 03-3903-3800